**槍ヶ岳から蝶槍へ**

Macchan90

　梅雨明け以降の今年の猛暑と言ったら無い。2018年は、記録と記憶とに残る夏となろう。

　この連日の好天を生かすべく、餓鬼岳に湯ノ丸山に美ヶ原に、五竜に鹿島槍に爺に雨飾に登るも未だ雨の気配もない。引き続き登るが、いよいよ槍ヶ岳登頂が私の中で浮上してきた。

　槍ヶ岳は日本に於いては他に求めるべくもない程に兎に角、格好の決まった山である。東西南北に鎌尾根を引き、尖塔が周囲を睥睨する。四つすべてのそれら尾根が岳人の魅力的な登山対象となり、トンガリはこの山を目指さずにはおれない程のランドマークである。ただ、沢登りに視点を置くと、魅力を見出すのが些か苦しい四周の沢々である。というのも氷河地形の名残故に多量のモレーンが源頭を埋めており、さりとて下部すらも大味な沢であることを免れないでいる。

　2002年秋に、天上沢から登る機会があったもののこんな岐阜の山、何時でも登れるわと思って降りてしまったことがある。一度逃すとこの手のチャンスは中々巡って来ないものである。早や十六年！

　春にヤマレコmocamocomoco氏のワンデイ飛騨沢尻滑りの記録を拝見して心動いたものの、この春は身体の不調で動くに動けず(雪融けも早かった)、この夏に至って先週先々週と目にするに当たっていたたまれない気持ちになり何はともあれアレに登ろう、ただ、それのみで済ますのも底が浅い、そう考えた際に以前より気に掛けていた梓川遡行コレクションの対象である徳沢を絡めて計画したところ、その沢の先に「蝶槍」とあったのを見出してコレだ！と閃いた。オマケに先週は鹿島槍ヶ岳だった。飛騨沢、槍沢、そして徳沢を繋いだ『槍ヶ岳から蝶槍へ』の山行は、些か長駆だが体調も良好な今なら何とかなろう。急遽、菩薩の家内に了承を得て、ザザッと荷を詰めて出掛けた。前日まで水鉛沢もイイかも、などと逡巡しつつ。

**7/31**；昨晩は9時半就寝、２時半起床してタケオに声掛けして３時に出掛ける。６時には無料だという深山荘隣駐車場に到着するも既にお満車と！軽ということで辛うじていいよと言われた場所に停めて出発した。登山指導センターに登山届を提出して奥へ。右俣谷へは初めての道で、これは秋に予定の滝谷の行程調査も兼ねている。白出沢出合を越えツッタカ歩いて滝谷出合が9時、これだと二人でD沢とは言えど秋故にワンデイはキツかろう。雄滝とドームが威圧的に見え、これに踏み込むのはやはり勇気が要る。滝谷の渡渉で島根父子に声を掛けられた。「お足元はもしや地下足袋ですか」と。如何にも、そして折角なので藤木九三レリーフについても講釈差し上げた。父子も今日中に槍ヶ岳山荘までというが、高差2090ｍは私にしても中々にキツイのヨ。登行中は終始眠気に纏わりつかれてガリガリ登って行く感じにはなかった。高度を上げるにつれガスが湧き、日射が遮られて却って助かった。道脇には今年が当たり年らしいコバイケイソウの群落が有ったり、爺ヶ岳では見掛けなかった雷鳥親子を見掛けたりして、まぁ飽きない。ある頃から百ｍおきに現れる標高表示が現れ、2800ｍであと金華山一丁だと思うが流石は日本第5位のことだけはある。睡魔に打ち勝ち、ようやく着いた槍ヶ岳山荘ではアンテナが何本立っているだの声高に喋る中高年男女、今風の言葉で甲高く喋くる女学生のような男児たちと何かとかまびすしい。公衆電話まである3100ｍのこの地は山であっても山ではない。人生二度目の稜線キャンプに支払済ませ、空荷で槍の穂先へ。奈良は東大寺学園の学生が一群れ先行しており、高差80ｍに30分掛かった。ヘルメット着用率は95％位か。槍ヶ岳に登っておきながらいつもの癖で「槍の穂先はどこだ？」と探すこの間抜けさよ、ガスに巻かれるも常念位は見える視界であった。東大寺学園の子等と言えども西田幾多郎今西錦司の話をするでもなく、スマホ弄る普通さだったナ。梯子の前を歩いていた福岡から来たというクラッカー伊倉似の兄さんが心安く「写真撮りましょうか」と声掛け呉れて、山頂写真なぞに納まったりとやはり私には不似合いな山頂であった。ガヤガヤと、感慨に耽る場にもまた播隆上人への思いを寄せる場にもなかったけれども穂先に立ち、松本の街からピョコッと見えたあの先っぽに今居ることを思った。降りるにも30分掛けて、テントにスッ込んでアッという間に寝入った。

**8/1**；やはりテント場の朝は早かった。二時にはオバちゃんが喋り出して起こされる。ヘッドランプに照らされたりと、神経繊細な私には些かキツい場所である。月も星も出て視界は良好の様子で折角のことなので3時半に寝袋持って山頂へ出掛けた。暗いが岩場や梯子に不安はなく、山頂に着いたが意外や誰も居なかった。東の空が既に白んできている感じが私に三方崩山を思い出さす。寝袋に包まって日の出を待っていると4時頃から続々と登山者が上がってきて挨拶を交わす。薄明の中に、二月に登った鷲羽岳や昨年の赤沢山、常念岳等が浮かぶ。播隆が槍ヶ岳を目指すキッカケとした笠ヶ岳は流石に存在感ある岐阜の名山だ。北鎌尾根よりも前穂北尾根が目立ち、富士山らしきも遠望された。5時前に御来光を拝んで(便意に押されて)下り、槍ヶ岳から生じた水の流れに沿うて槍沢を(播隆窟に立ち寄るのを忘れず)、徳沢まで急がず降った。私にとり徳沢は小洒落た山荘の立つ地名にはなく、蝶ヶ岳への登路としての沢名「徳沢」なのであり、梓川流域遡行対象コレクションの一本として外せない一本であった。が、伏流もあって入渓して余りの規模の小ささに危うく遡行自体を取り止めそうになったのが正直なところであった。花崗岩主体の白い一ノ俣二ノ俣とは違い、堆積岩らしい黒い沢床も意外と言えば意外だった。早々と徳沢に天幕を張って、標高と共に値段下がったロング缶を飲んで昼寝に夕寝に夜寝にと、寝倒して、、、、。

**8/2**；朝を迎えたのが4時。戻って来るので不要な荷を纏めて置き、軽装で徳沢遡行を開始した。サワグルミとカツラの多い自然林を流れる徳沢は伏流からの流れを復活し、そのショボさから復権する。例のマルトールの甘い香りは何も秋だけのものではない、雰囲気に色添えて、振り返れば朝焼けに映える穂高が厳つい。堰堤が三つ現れて気色悪かった。流れ自体は凡沢で褒めるべくもないが、大沢出合からカラマツ沢出合までの雰囲気は中々好ましかった。沢の向き悪く陽が当たらず、水温もあって寒くて仕様がない。上マグサ沢が出合ってようやく陽の光を浴びて一服できた。左折して岳沢と名を変えた沢には、地図にあるように羽衣ノ滝が垂れており、名称から予想した通りに威圧感の無い緩斜滝でロープ不携行で正解だった。落ちたら駄目よ、の自由登攀で滝上へ。意外にも二段50m位はあった。滑斜滝が続いて、小気味良く標高を上げ、トリカブトの多い花畑を突っ切って這松が現れたと思ったら蝶ヶ岳最高点はそこだった。ドンピシャからは30m程外してしまったが、まぁいい。雲一つない槍穂の展望が豪奢である。天上散歩でかつての正式山頂だったという蝶槍目指すが正直、槍という程のことはない。槍槍を写真に収めて、目的は果たした。すれ違った上品な単独オバサマは、好天続く限り穂高を目指すという。長塀尾根上の伐採根株は、伐倒後に伐り直してあり且つ水平であるのに感心した。これまで数多見てきたダダクサなナナメ切り株が殆どというお寒い中で、伐倒者の性格を見る思いだった。徳沢からの湧き間も観察される自然探勝路の佇まいに感心しつつ嘉門次に挨拶して、明神池にも立ち寄って上高地バスセンターに着く頃には情けなくもヘロヘロの体だった。ウエスタンに交じってオンタイムでバスに辷り乗り込み、平湯温泉経由で出発地の新穂高まで。夕陽が美しく照る中で沖縄民謡を聴きつ安全運転を何より心掛けて高山経由で岐阜までドライブした。前回同様に、またしても美濃を通る最中に聞いたラジオ報道が告げる美濃の最高気温が39.8℃とは偶然の一致にも程がある。歩行距離50㎞超、流石に堪えた。玄関で子供達が迎えてくれて、ようやく緊張から解放された。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　【2018.8.4早朝記す】

【タイム】

7/31自宅発(300) 深山荘Ｐ発(615)登山センター(625-30)穂高平小屋(720)白出沢出合(800-10)滝谷出合(900-35)槍平(1015)千丈分岐(1205-25)飛騨乗越(1405)槍ヶ岳山荘(1420-55)槍ヶ岳山頂(1525-1600?)槍ヶ岳山荘着(1630)

8/1発(330)槍ヶ岳山頂(340-455)着(500)再発(600)天狗原(655)大曲(720-30)槍沢ロッジ(815-35)二ノ俣出合(855)一ノ俣出合(900-20)横尾山荘(1000)徳沢(1055-1120)徳沢出合(1130)泊(1150)

8/2発(445)曲り沢出合(540)上り沢出合(600)右からの大ガレ(615-25)大沢出合(640)カラマツ沢出合(705)奥悪沢出合(725)上マグサ沢出合(740-55)羽衣ノ滝上二俣(830)蝶ヶ岳(950/1100)分岐(1010/1040)三角点蝶(1015/1035)蝶槍(1020-30)長塀山(1135)徳沢(1250-1330)明神分岐(1410)上高地バスターミナル着(1530)発(1535)平湯温泉バスタ着(?)発(1640)深山荘Ｐ着(1720)荒神の湯発(1750)帰宅(2120)